

---

# コンプレックス

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンプレックス

### 【Zマーク】

Z5930B

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

先輩は眼鏡が似合つしカツコイ。怒りっぽい所はあるけれど…  
…そのままが一番先輩らしいです。

冷蔵庫から取り出した、小岩井のコーヒー＝ミルクはよく冷えていて、手にとると指先が桃色に染まつた。それをソファ放り投げ、お気に入りのフードつきパークーを被る様に着込んだ私は、どっかりと腰掛けた。

糖分が体に染みこんでいくような錯覚を覚え、体が疲れきつているときは、特に糖分を摂取したいと思うようになる。固形のチョコやその類の洋菓子でも好いのだが、やはり液体の方が糖分を摂つていると実感できる。

「そんな甘そうな飲み物がよく飲めるなあ、お前」

「甘いものは疲れた体に悪いに決まっている」

反対に、橘先輩は甘いものが大嫌いだ。いつも何故か野菜ジュースを持ち歩いている。

「野菜ジュースなんて飲んだら、そのうち脳が溶けて、歯がボロボロになつて……」

「どこで、そんなテーマを吹き込まれた？」

いつも怒つているような口調の癖に、実際に怒つている時と口調が変わらないのはどうしてだろうか。そんな事を考えながら橘先輩の顔を見ると、先輩も同じように私の顔を見ていた。

「なんですか？」

「え？」

「だつて、急に私の顔をジロジロと……顔に何かついてますか？」

私は低いテーブルの上にあつた黒い手鏡を手にとつた。

「なんでもねえよ、ただ……」

「ただ?なんですか？」

「ただ、なんでそんなに無防備な顔ができるのかなと思つて」

「私がアホ面だつて言いたいんですか?」

手鏡に映つた自分の顔をよく見ると、たしかに賢そうには見えない。橘先輩は、それに比べて眼鏡のせいか、如何にも優等生に見えた。

「私も眼鏡でも掛けようかなあ」

「……なんでそうなるんだ」

気付くと小岩井は空っぽで、糖分が私の体に充填されたようだ。

「先輩がカツコいいのは眼鏡のせいでしょう。うん、そうに違いない」

「なに一人で納得してるんだよ」

「ほら、またそうやって先輩は怒る」

「ほら、またそうやって先輩は怒る」

「別に怒つてねえよ」

「糖分足りて無いんじゃないですか」

「うるせえ」

私は先輩の怒つているのか、怒つてないのか分からぬ口調が結構好きかもしないと、少しだけ思った。

「先輩の野菜ジュース、一口くださいよ」

「なんで？」

「少しは頭が良くなるかも」

「ならねえよ、そんなの。それに眼鏡なんか掛けても頭よくならな

いし」

そう言つと、先輩は野菜ジュースを飲み干した。

「先輩のケチ」

「そういう問題じゃねえって」

「じゃあ、どうゆう問題なんです」

自分でも珍しく思つたが、私は先輩に突つかかつた。

「実は俺、眼鏡掛けるのが、すごく嫌で、眼鏡掛てる俺も嫌いなんだ。カツコ悪いし、がり勉みたいで……」

なぜか悲しそうな先輩を見るのが私は嫌だつた。

「先輩、カツコ悪い。そんな変な事言つ先輩はカツコ悪いです。眼鏡掛けてない先輩なんて先輩じゃないし、そのままの先輩が一番カツコ良いし、先輩らしくないし、先輩ケチだし」

私は早口で言つと、先輩から眼鏡を奪つた。

「どうだ、私の方が眼鏡が似合つんじゃ……」

強烈な視界の歪みが私を襲い、立っているのがキツイくらいだった。

「おい、やめろって。返せよ」

「やだ」

私は何とか目を瞑つてソファに座り、眼鏡を抑えた。

「ふざけてる場合か、本当に田が悪くなつたらどうする気だ」

先輩の手を拒絶して、私は眼鏡を取られるのを防いだ。

「いやです。先輩が眼鏡掛けないなら私が掛けます」

「お前には眼鏡は似合わないって、いいから返せよ」

先輩の意外に大きい手が、私から眼鏡を奪つていった。そして、そこにはいつもの眼鏡を掛けた先輩が居た。

「いいよ、俺が掛ける」

怒った様な口調も先輩のままだつた。

「眼鏡、似合つてますよ先輩は……。私より何倍もカッコ良いです」

「お前が似合わなさすぎなんだよ」

先輩は少しだけ笑いながらそう言つた。笑つた顔もそんなに嫌いじやないな、と私は思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5930b/>

---

コンプレックス

2010年10月13日19時17分発行